



鶴ヶ城



伊達政宗、蒲生氏郷 関係略年表

弘治2(1556)年	蒲生氏郷、近江国日野城主賢秀の嫡男として生まれる
永祿8(1565)年	伊達氏が耶麻郡檜原を攻める
永祿9(1566)年	葦名盛氏が伊達輝宗と和睦
永祿10(1567)年	伊達政宗、伊達輝宗の嫡男として米沢城に生まれる
永祿11(1568)年	織田信長、六角氏の観音寺城を攻める。蒲生賢秀は信長に降り、氏郷が人質として岐阜に送られる
永祿12(1569)年	信長、娘の冬姫を氏郷に嫁がせる。氏郷、人質を解かれ日野に帰る
元龜2(1571)年	信長、伊勢の一向一揆を攻め、氏郷も出陣する
天正9(1581)年	氏郷、信長の伊賀進攻に従い、名張郡を征す
天正10(1582)年	信長、京都本能寺で自害。氏郷は信長の家族を日野城に迎え籠城
天正11(1583)年	氏郷の嫡男・秀行生まれる。秀吉の先手となり亀山城を落とす。氏郷の妹・とら、秀吉の側室に召される
天正12(1584)年	政宗、輝宗より家督を譲られる
天正13(1585)年	政宗、耶麻郡檜原を攻める。二本松城主畠山義継伊達に降る。氏郷、キリシタン信者となる
天正14(1586)年	政宗、畠山氏を追放し二本松城を攻略。葦名龜若丸が死去
天正15(1587)年	佐竹義広が養子となり、葦名氏の家督を継ぐ
天正16(1588)年	葦名義広が佐竹義重らと結び、安積郡郡山で政宗と戦う
天正17(1589)年	磐梯山麓、摺上原で義広と政宗が戦い、政宗が勝つ。義広は常陸に逃れ、政宗は黒川に入る。政宗、会津商人司築田氏の支配を認める
天正18(1590)年	政宗、小田原に参陣、黒川を去り米沢へ戻される。秀吉、会津を訪れ奥羽仕置を行う。氏郷、会津を与えられる。氏郷が葛西・大崎一揆鎮圧のため政宗と共に出陣。氏郷と政宗、起請文を交わし和解を誓う
天正19(1591)年	氏郷、黒川帰着後、上洛。秀吉に政宗の叛状を具申する。政宗、秀吉に弁明、無実とされる。氏郷、千利休の次男少庵を会津に引き取る
文祿元(1592)年	氏郷、朝鮮出兵で肥前名護屋に出陣。城郭と城下町建設を着工。黒川を若松と改める
文祿2(1593)年	七層天守閣完成、鶴ヶ城と名付ける。氏郷、名護屋より帰着。城下に六斎市を開く。播磨国より瓦師を招き、城東小田村で瓦を焼く
文祿3(1594)年	氏郷、上洛。氏郷の母没する。この年、氏郷会津仙道の検地を終える
文祿4(1595)年	氏郷、京都で死去(40歳)。秀行が襲封、鶴ヶ城に入る
慶長元(1596)年	秀行と家康の娘振姫との婚約成立
慶長2(1597)年	上杉景勝、五大老の一人に任じられる
慶長3(1598)年	秀吉、秀行を宇都宮18万石に、景勝を会津120万石に移封
慶長5(1600)年	関ヶ原の敗報により、上杉軍は最上から撤兵
慶長6(1601)年	景勝は米沢30万石に移され、秀行が60万石で会津領主となる

資料提供 / 高橋充

講師：高橋充氏



昭和40年、千葉県生まれ。東北大学文学部史学科卒業、東北大学大学院文学研究科博士課程前期修了。福島県立博物館学芸員として、福島県の武士の古文書や、信仰に関する資料を調査する。編著に『東北の中世史⑤ 東北近世の胎動』（吉川弘文館）がある。



深まる一冊

東北の中世史⑤ 東北近世の胎動
高橋充編(吉川弘文館)

豊臣政権による「奥羽仕置」以降、中世から近世へ激動した東北の転換期を、伊達政宗と蒲生氏郷の拮抗や「北の関ヶ原」などから見詰める。



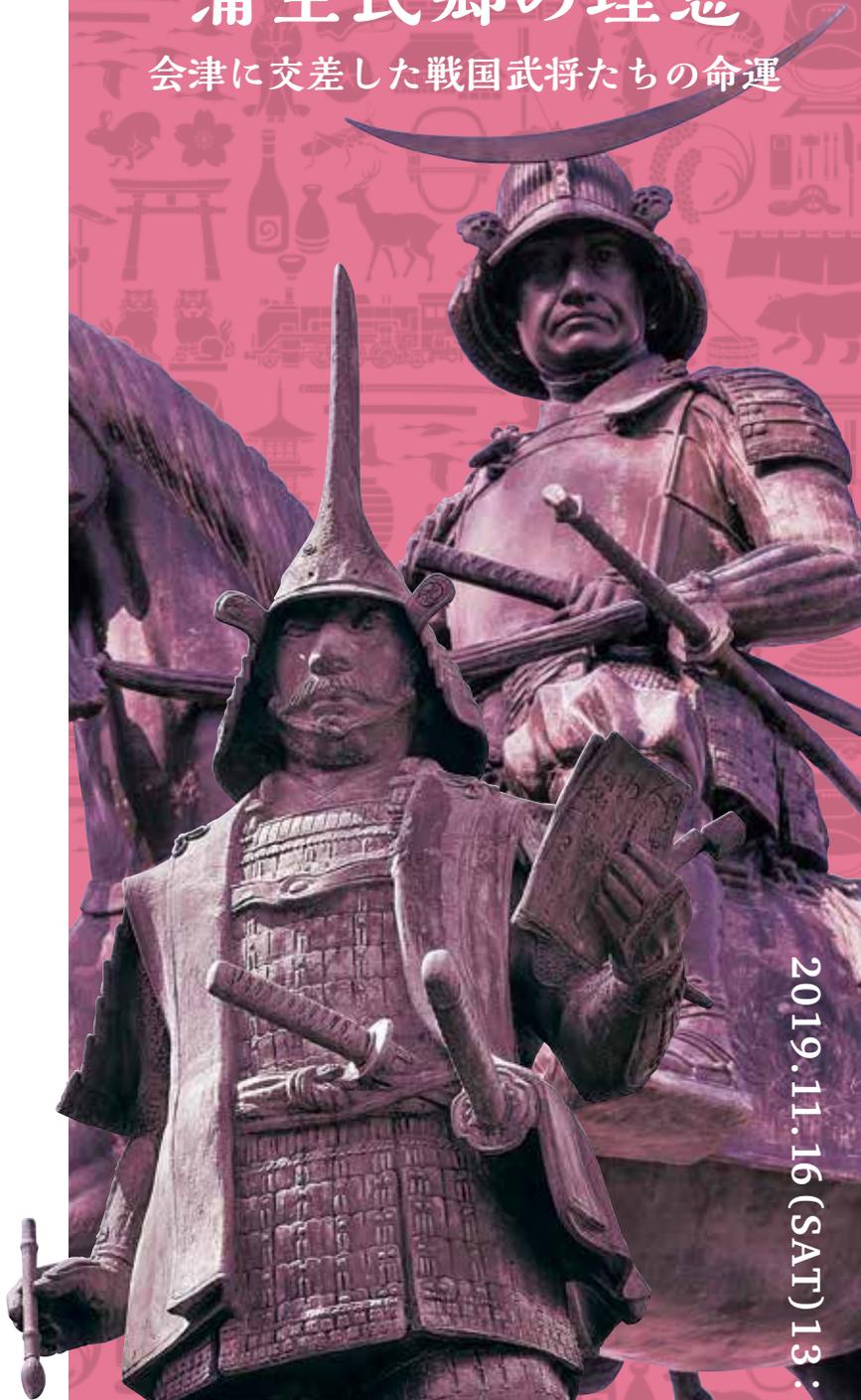
FUKUSHIMA

福島

第7回 第1部

伊達政宗の挑戦、蒲生氏郷の理想

会津に交差した戦国武将たちの命運



2019.11.16(SAT) 13:00

伊達政宗の挑戦、蒲生氏郷の理想 会津に交差した戦国武将たちの命運



背灸峠の眼下に広がる会津若松。蒲生氏郷は、福島県中通り・白河からこの峠を越えて会津入りしたという



1 軍事・政治上の要衝となった会津

会津若松市に、東北最古級の巨大な前方後円墳がある。大塚山古墳という。ヤマト王権とつながりの深い大豪族が、この地に存在したことを示す遺跡だ。また、会津で出土する縄文土器には、北陸や関東の土器の影（瑞巖寺蔵 撮影／井上久美子）響が見られる。この地が東北の玄関口として、大昔から交通の要衝だったことをうかがわせる。時代が下って戦国時代後期、およそ400年にわたり会津を支配していた葦名氏を伊達政宗が倒す。現在の会津地方から中通り地方にいたる地域は、そのころから交通の要衝に加え、東北、関東の抑えという軍事・政治的重要性が高まっていく。この時代、近畿では「近江を制する者が天下を制する」といわれたが、それに倣えば「会津を制する者が東国を制する」といえるほどの位置づけを会津領は持たされていた。会津の領主は政宗以降、蒲生、上杉、蒲生、加藤と目まぐるしく変わるが、伊達政宗から蒲生氏郷の統治にいたる時代は、会津ひいては東北にとって大きな転換期ともなった。

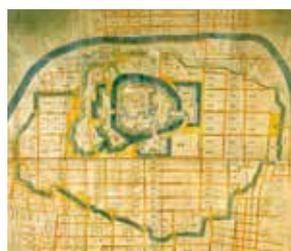


伊達政宗甲冑倚像（瑞巖寺蔵 撮影／井上久美子）

が関東へ打って出るより早く、豊臣秀吉が天下人の座についた。秀吉の小田原攻め(天正18年)に際し、政宗が秀吉への恭順を決意したこの年、秀吉は宇都宮から会津に入り、奥羽仕置を行った。奥羽の諸大名の改易・配置替え、検地など諸政策の実施である。秀吉の天下人としての権勢を、奥羽に示す意図もあった。この仕置で政宗は領土を没収され、岩出山(宮城県)に封じられる。政宗の挑戦は、会津を奪取してわずか1年半ほどでつづいたのである。

天正19年、北奥に遠征する氏郷が諸將の配置を記した「九戸出陣陣立書」（福島県立博物館蔵）

3 東北にはない最新の城と城下を築いた氏郷



幕府に提出された「陸奥国会津城絵図」。城郭構造や侍屋敷、町屋の街区が書かれている（福島県立博物館蔵）

政宗に代わり、42万石(後に92万石)を与えられ、会津領主となったのが蒲生氏郷である。政宗は、自らの力で領土を獲得していった大名。対して氏郷は秀吉の命により赴任した大名である。この違いが奥羽の転機をよく表している。氏郷の赴任により、奥羽が秀吉の進める中央集権構想の内に置かれたのである。氏郷は、戦で荒廃した会津の城と城下を整備し、産業の振興にも取り組む。7層の天守を擁したと伝えられる鶴ヶ城、そして武家町と町人町を分けた町割り。彼が理想としたのは、当時の東北にはなかった最新の町を会津に築くことだった。だが、氏郷は志半ば、40歳の若さで逝去する。彼の理想は、徳川の世になり、再び会津に藩主として着任した子の秀行に引き継がれる。氏郷が構想した町割り、そして彼が興した産業は、会津の町に今も息づいている。

蒲生氏郷（西光寺「紙本着色蒲生氏郷像」より）

2 会津奪取により最大の版図を得た政宗

天正17(1589)年6月、政宗は磐梯山麓の摺上原における合戦で葦名義広を破り、黒川(後の鶴ヶ城)に入城した。このとき政宗

天正17年に南奥羽をほぼ制覇し、常陸佐竹氏を攻める決意を記した「伊達政宗書状」（福島県立博物館蔵）



は23歳。領国は現在の福島、宮城、山形にまたがり、伊達氏歴代で最大となった。さらに政宗は、関東への進出ももくろんでいた。若き雄は、領土拡大の野望に燃えていたと思われる。しかし、思いもかけぬことに、彼

